

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **4** までで、17 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の「ア・イ・ウ・エ」のうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の○の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 廉価な商品。
- (2) 試供品を無料で頒布する。
- (3) 悔恨の思いにかられる。
- (4) 昼を欺くばかりの明るさだ。
- (5) 日本とアメリカの二箇国はメイユウのような関係にある。
- (6) パン屋さんのカンバンを目印に進む。
- (7) 三年ぶりに生まれ育ったキョウリに帰る。
- (8) 新しいリョウイキを開拓する。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「俺」は、勤め先のホテルで開かれる催し物の招待状の宛名書きを依頼するために書道家の遠田のもとを訪れたが、遠田が書道教室で子どもたちに教えている最中だったため、終わるまで見学しながら待っている。遠田は独特の言葉づかいで指導するが、その品のない表現に子どもたちはあきれて文句を言っている。

遠田はブーイングを気にする様子もなく、ひととおり生徒たちの「風」を見てまわり、

「なにかがたりないっていうか、堅いんだよなあ。」

と敷居をまたいで仁王立ちした。「いったいどういう『風』を思い浮かべて書いてんだ？」

「どういうって……。」

「風は風だよね。」

教室のあちこちで困惑の囁きが交わされる。

「漠然と書いてるから、面白味がねえんだよ。」

と遠田は断じた。「いつも言ってるだろ。手本なんか参考程度にしときゃいい。大事なのは文字の奥にあるもんを想像することだ。『朝顔』って書くことになったら、『どんな色の花を咲かせてる朝顔かな。もしかしたら小便用の便器かも』って、文字を通して自分が伝えたいことはなにかを考えてみるんだ。」

「よくわかんないけど、おしっこから離れてよ。」

女の子のうちの一人が顔をしかめ、

「すまん。」

と素直に謝った遠田は、なにを思ったか六畳間と八畳間の掃きだし窓をすべて開け放った。

熱と乾いて埃ほこりっぽい庭土の香りがドツと室内になだれこむ。

「暑いー！」

「熱中症になったらどうすんの。」

生徒たちは悲鳴を上げたが、人工の冷気が夏の威力にかき乱され、薄まっていくのを体感し、どこかはしゃいんでいるようでもあった。

「ほら、これが夏の風だ。」

遠田がそう宣言するのを見はからったように、暑気を切り裂いて一陣の風が吹き抜け、庭の桜の葉を、そして生徒たちの手もとの半紙を、さわさわと揺らした。

「どんな風だった？」

窓を閉めながら遠田が尋ねると、

⁽¹⁾
「ぬるかった。」

「そうかな、けっこう涼しかったよ。」

と生徒たちは口々に答える。

「じゃ、いま感じたことを思い浮かべながら、もう一度『風』って書いてみな。」

遠田は再び文机*に向かって腰を下ろした。⁽²⁾「そういう習慣をつけと

きや、そのうち真夏にも冬の『風』を書けるようになる。」

エアコンが「一からやりなおしだ。」とばかりにゴウゴウと音を立てる。でも生徒たちは気を取られることなく、また涼しくなっていく部屋のなかで真剣に半紙に向きあい、それぞれの夏の「風」を書きはじめた。

納得のいく書を書きあげたものが、つぎつぎと遠田に見せにくる。最終的には生徒全員が文机のまわりに集結した。

遠田は一人一人の書を丁寧に見、

「うん、軽やかでいい感じの風が吹いてる。この『虫』みたいな部分の角っこは、つぎからもう少し筆を立てて書くようにしたほうがいいかな。」

「夏の蒸し暑さがよく出てるじゃねえか。だが、そこを重視しすぎて、二画目のハネがちよっともたついちまったな。ま、滞留する風もたまにはあるってことで、よしとするか。」

などと感想を述べつつ、各人の書に朱墨で大きく花丸を描いて返した。正座した生徒たちは、自分以外の書の講評にも耳を傾け、遠田の言葉にうなずいたり笑ったりする。

素人しょうとの俺の目にも、窓からの風を感じたあとの生徒たちの字は生き生きと躍動して見えた。もちろん、生徒たちの長机にある、遠田が手本として書いた「風」とはレベルがまるでちがう。遠田の手本は、夏の嵐のような猛々たけだけしさを秘めながらも、いわゆる「習字のお手本のなうまい字」だった。それに対して生徒たちの「風」は、いびつだったりたどたどしかったりする。

でも遠田は、手本に無理に近づけるためのアドバイスはしなかった。俺もいつしか文机ににじり寄って、生徒たちが遠田に差しだす半紙に夢

中で見入った。それぞれが感じた夏の風が、思い思いの形で文字にこめられていた。まわりつくような「風」。清涼でホッと一息つける「風」。やっぱりエアコンの利いた部屋のほうがいいなという「風」。

⁽³⁾ 俺は感心した。なるほど、「風」という一文字だけでも、こんなに多種多様で自由なものだったのか。書道とはこんなにのびのびと気楽に取り組めるものなのか。なにより、遠田に書を褒められ、改善点を教えてもらう子どもたちの、誇らしげで楽しそうな表情といたらどうだ。

たとえや指導法に少々下品だったり型破りではと思われるところはあ
るが、遠田は書道教室の先生として、やはり逸材^(a)なのだろうと察せられた。書家としてのレベルは、俺にはよくわからない。ただ、手本の文字が力強く端整で、目を惹かれるもののはたしかだ。

^{*} へのへのもへじを書いていた男の子の「風」は、あらゆる線がなんだか震えていた。

「こりゃあ……。」

と遠田は言った。「おまえもしかして、吹く『風』じゃなく、引く『カゼ』を思い浮かべながら書いたんじゃないか。」

「すげえ！　なんでわかったの若先^{*わかぜん}！」

へのへのもへじの男の子は手を叩いて喜び、まわりの子たちは「そのカゼじゃないよ！」と口々に叫んで笑い転げた。小学生の笑いのツボがわからなかったが、それはともかく、なぜ遠田がカゼだと見抜いたのか、俺も知りたい。

「やっぱりな。悪寒^{おかん}って感じがする。」

と遠田は言った。

「オカンってなに？」

「ママのこと？」

「『ママ』って呼んでんのかよ、だっせえ。」

「じゃあなんて呼ぶの。」

「『母ちゃん』だろ。」

「嘘^{うそ}だあ。あんたが『ママ』って呼んでるの見たことあんだからね。」

子どもたちの会話はどんどん脱線していったが、遠田はいたってマイペースで、震える「風」にもゆったりと花丸を描いたのち、

「カゼ引いたとき、熱が高いのに寒くてぶるぶるすんだろ。あれが悪寒⁽⁴⁾だ。」

と律儀^{(b)りぎ}に説明した。「俺がすごいんじゃない、悪寒^(b)つばさを伝えてきたおまえの字がすごいんだよ。その調子で、今度から『風』の一字には吹く風の意味をこめろ。いきなり反則技かましてくんじゃねえ。」

⁽⁴⁾ 「はい。」

へのへのもへじの男の子は照れ笑いしたが、いたずらが成功してうれしそうでもあった。

全員の書を確認し終えた遠田は、

「よっしゃ、また来週な。気をつけて帰れや。」

と立ちあがった。生徒たちは、

「ありがとございましたー。」

と正座したままきちんと礼をし、半紙をばたばた振って墨を乾かしながら長机に散った。帰り仕度ができたものから、三々五々、教室を出ていく。

「待たせて悪かったな。」

と遠田は俺に言い、「茶でもいれてくるわ。」と八畳間の襖ふすまを開け、廊下へ出ていった。廊下を挟んだ反対がわに台所があるようだ。

見下ろされる形だったから、あまり謝られている感じがしなかったが、まあいい。俺は正座を崩し、しびれた足とふくらはぎを揉もんだ。書道教室の見学が予想外におもしろくて忘れていたが、そういえば喉がからからだ。飲み物をもらえぬならありがたい。

俺は畳に置いていた鞆かばんを引き寄せ、名刺入れをポケットに移した。紙袋から手土産の箱も取りだし、渡すときに備える。中身はホテルの人氣商品、「三日月フィナンシェ」の詰めあわせだ。その名のとおり三日月形で、バター、チョコ、抹茶と三種の味をお楽しみいただける。

台所からガコンガコンと音がする。製氷器から氷を取りだそうとしているのだと推測されるが、通常は器をちよつとひねるようにすれば氷が落ちるはずで、いくらなんでも固すぎやしないか。いつから冷凍庫に入っていた氷が供されるのだろうかと不安になり、思わず顔を上げた。そこではじめて、教室内に一人だけ男の子が残っていることに気づいた。

五年生か六年生だろう。廊下がわの最前列で書を書いていた子だ。筆などの道具は書道バッグに収めたようで、長机のうえはきれいに片づいていたが、いまもうつむきかげんに座ったままだ。やや影が薄いというか、教室のあいだもみんなと騒ぐことはほとんどなく、静かに微笑ほほえんでいた。男の子が書いた「風」もまた、印象が薄いと言ってはなんだが、丁寧だけれど線が細く、俺などは「なんだか弱々しいな」と思うのみだった。遠田は、「夏は微風が吹くだけでも、ラッキーって感じがするよな。」

ちよつとだけ涼しくなっただけでうれしい、って気持ち思い起こさせる『風だ。』と前向きに評していたが。

俺がちらちら向ける視線に気づき、男の子は小さく頭を下げた。慌てて正座をしながらおして会釈えしやくを返しつつ、「どうしよう、遠田になにか用があるんだらうけど、俺も大人として『どうしたの』って聞くべきなのか？」と内心で目まぐるしく逡巡しゆんじゆんしていたら、襖がスパンと開いて台所から戻ってきた遠田が、

「あん？ ミッキー帰らねえのか。どうした。」

とズバンと聞いた。男の子の名字はまずまちががなく、三木みきというんだらうなと俺は思った。

「あの、若先にちよつと頼みたいことが……。」

蚊の鳴くような男の子の声をしまいまで聞かず、

「わかった。」

と遠田は言った。「もう一個作ってくるから、さきに飲んでろや。」

遠田が運んできた丸盆には、ガラスのコップがふたつ載っていた。

(三浦しをん「墨のゆらめき」による)

新潮社刊

〔注〕 朝顔——つる性の一年草。花の形から男性用小便器を指す語

としても用いられる。

掃きだし窓——室内のごみを掃き出すために、床に接して造つ

た窓。

文机——和室で座って書物を読んだり書き物をしたりするための机。

へのへのもへじ——「へ・の・へ・の・も・へ・じ」の七文字
のひらがなを組み合わせる人顔に見立て
たもの。しばしば落書きとして描かれる。

若先——「若先生」の略。遠田は先代の書道教師のあとを継いだためにこう呼ばれている。

〔問1〕⁽¹⁾「ぬるかった。」「そうかな、けっこう涼しかったよ。」と生徒

たちは口々に答える。とあるが、このときの生徒たちの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア なだれ込んできた熱気に最初は驚いていたが、次第にその感触に引き付けられ、吹き抜けた夏の風を感じ取っている。

イ 最初は穏やかに吹いていた夏の風が一変して、冷えた空気を切り裂くかのように鋭く吹きつけてきたことに驚いている。

ウ 吹き込んできた熱と埃のにおいに気をとられ、夏の風がどのようなだったか曖昧になってしまい、思い出そうとしている。

エ 遠田の行動に最初は不満を抱いたが、やさしくそよぐ夏の風に心が安らぐにつれて、不機嫌な態度をとったことを気にしている。

〔問2〕⁽²⁾「そういう習慣をつけときゃ、そのうち真夏にも冬の『風』を書けるようになる。」とあるが、この言葉が表していることとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア いま感じたことを思い浮かべる習慣をつけておけば、以前に見たり聞いたことでも、新しい視点で捉え直して書けるようになるということ。

イ いま感じたことを思い浮かべて字に書いて表現するためには、言葉で言い表して覚えておくことが必要なので、微妙な言葉の違いに敏感になっていくということ。

ウ いま感じたことを思い浮かべる習慣をつけることで、細やかな観察力がきたえられ、他の人が見逃してしまうような季節の変化も感じ取ることができるということ。

エ いま感じたことを思い浮かべて字を書く訓練を積み重ねれば、やがては過去に感じたことであっても、ありありと心中に再現して字に表現することができるということ。

〔問3〕⁽³⁾ 俺は感心した。とあるが、どういうことに感心したのか。最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 子どもたちの、遠田の手本の文字が何を伝えようとしているかを考えている姿やのびのびと書に向き合う様子と、大人の「俺」でさえも納得させる遠田の講評の的確さ。

イ 子どもたちの、多種多様な書道の表現技法をすんなり理解して遠田の力強く端整な字体に近づこうと努力する様子と、わんぱくな子どもたちの気を引く遠田の話術の巧みさ。

ウ 子どもたちの、自分の感じたことを書で表現しようと熱中している姿や遠田の講評を聞こうとする和やかな様子と、子どもたちをそのような態度に導く遠田の手腕の見事さ。

エ 子どもたちの、文字の奥にある書き手の思いを読み取って書いた字を遠田に褒められて自信をつけていく様子と、下手でもいいのだと伝えようとする遠田のおおらかさ。

〔問4〕⁽⁴⁾ 「はーい。」とあるが、このときの男の子の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 手本を無視して自由に書いた字を、遠田に高く評価され、周囲の子どもたちに対して優越感を抱いている。

イ 手本の言葉をわざと違う意味に解釈して書いた字を思いがけず遠田に褒められて、うれしさを隠しきれないでいる。

ウ ひそかに手本とは違うものを思い浮かべて書いたところ、遠田にあっさりと見破られて、その鋭い観察眼に感服している。

エ 気に入らない遠田に反抗するために、手本を大幅に崩して書いたところ、逆にその才能を認められ、照れくさく思っている。

〔問5〕^(a) 逸材^(b) 律儀^(b) とあるが、本文中で述べられている「逸材」「律儀」の意味に最も近いのは次のうちどれか。それぞれ選べ。

ア 強い個性の持ち主 イ すぐれた才能の持ち主
逸材^(a) 律儀^(b)

ウ 自由な発想の持ち主 エ 人並みはずれた度胸の持ち主
自由^(b) 律儀^(b)

ア 落ち着いて冷静である様子

イ 誰にとってもわかりやすい様子

ウ 気が引けるほど礼儀正しい様子

エ おろそかにせずきちんとした様子

〔問6〕 本文の「俺」と遠田について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 子どもに対しては自分が守ってやらなければならないという強い使命感を持つ「俺」に対して、遠田は子どもを特別扱いせず、大人と同じように接する人物である。

イ 周囲に気を配り人にどう見られているかを気にせずにはいられない「俺」に対して、遠田は細かいことにこだわらず、思ったことを率直に言う気さくな人物である。

ウ 自己中心的な性格のため人に思いやりを示すことに慣れていない「俺」に対して、遠田は相手の気持ちを察することが得意で、さりげない心遣いができる人物である。

エ 相手の反応におびえ人から嫌われることを恐れている「俺」に対して、遠田は他者の言動に左右されることなく堂々としていて、人と群れることを嫌っている人物である。

〔問7〕 本文の表現の特徴について説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 擬音語や擬態語を用いたり会話文を多く取り入れたりすることで、書道教室の情景を臨場感豊かに描き出している。

イ 会話文を多く取り入れることによって、それぞれの登場人物の気持ちや複数の視点から詳しく語られている。

ウ 随所に回想場面を折り込むことで登場人物の関係性や心情の変化を細やかに描き、物語の展開を支えている。

エ リズミカルな擬音語を用いたり倒置法を用いたりすることで、子どもたちの様子を印象的に描いている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

日本人は外国語に向かうとき、数多くの記号からなり複雑な体系をなす外国語をみて極度に緊張し、その裏返しで日本語は自然に何の苦労もなしに習得したと思いがちである。時には日本語の存在は空気のようなものであって、鼻をつままれたとき初めて空気の存在を意識するのと同じように、外国へ行つて日本語が通じなくなつて初めて日本語を話していることを意識する。このような傾向は外国語の研究者の間にさえもみられ、日本語も、習得しようとしている言語と同じ一つの言語だという意識はしばしば欠落している。

そんなわけなので、日本語についてのいろいろな迷信がある。しかもそれを日本人が信じ、日本人がひろめている。その一つは日本語は非常に難しい言語だという迷信で、もう一つは日本語は特殊な言語であるという迷信である。たまたま日本語を上手に話す外国人がいると、非常に驚くか、あるいは難しいはずの日本語をこれほどまでに習得されてがっかりするかのいずれかの反応を人は示すが、これは日本語は難しい言語だと*ア prioriに決めてかかっているからに他ならない。そしてこれはさらに日本語は特殊な言語だと飛躍していくのである。

(1) ところが実際には日本語はとりわけ難しい言語でもなければ、特殊な言語でもない。いろいろな言語に接してみると、日本語にあるもので外国語に例がないというようなことはなんにもない。ただ一つ非常に例が少ないというのなら、漢字や仮名をまぜて使う文字体系、一つの漢字に

いくつもの読み方のある表記法をあげることができよう。しかし、これとても稀有^{けう}ではあるが皆無ではなく、シユメール語^{*}のあり方はこれとかなり似ているところがある。たしかにこの文字体系は難しいので、この点だけなら日本語が難しいという主張に同意できる。

何しろ日本の漢字は二通りの読み方があって、いくらこれを外国人に説明しても分かつてもらえないという主張には、英語にだって *est*（元来は *is est* の略語）という語があつて、これは *that* ととも読まれますよといえばよい。もちろんこのような語は英語では例外的で数がごく限られているが、本来のラテン語を略したものを英語風に読むか、「すなわち」という意味をもとに英語読みにするかは、中国の発音をもとにした音と、漢字をその意味にあたる日本語で読んだ訓との区別とほぼ対応する。

ところが、日本人は何としても日本語を特殊な言語としたいらしい。そこでささやかな英語の知識を得ると、英語がすべての外国語の典型であると錯覚し、それと比べて日本語が違つと、すぐ日本語は特殊だからというのである。もうすこし多くの言語を眺めさえすればこのような誤解はいとも簡単に解消でき、逆に英語の方がかなり珍しいことだつてあることに気がつくはずである。例えば初歩の英文法でおなじみの進行形を持つている言語はそう多くない。従つて英語で書かれた語学書には日本人にとって無用な「この言語には ① 進行形がない」という記述に絶えずお目にかかることになる。また、時の一致などずいぶん持つて回ったいい方^{*}というか、屋上屋を架すというか珍しい表現法である。そもそも時間の関係を表現するだけなら副詞があれば十分で、言語によつては

②「昨日買います」「明日買います」で間に合っているのであるから、動詞の時制を二重にコントロールするなど珍しいことである。

もう一つ例をあげれば、人称代名詞と所有代名詞で、「I」と「my」すなわち、③「私が」と「私の」で違う語を用いるのは少数派である。^{*}「ich」や「mein」^{*}「je」や「mon」^{*}「a」や「mon」……と、英語方式のものが多くに思えるが、これは外国語としてインドヨーロッパ語が多く学習されている結果で、全体としては日本語のように「私が」と「私の」の中に共通の「私」がある方が圧倒的に多いのである。

②日本語を特殊語視しているうちはまだましたが、やがて、外国語の知識から日本語に対して誤った判断を下すようになる。よく聞かれる例は、「日本語は主語をよく略す」という表現である。この「略す」といういい方はすでに主語がなければならないことを前提にしている、主語があるのが当然という立場に立っている。世界の言語における文のあり方をみると、言語によっては主語・述語と揃うのが文のパターンの基本である言語もあれば、述語一つあれば十分な言語もある。④「あなたは学校に行きますか」、「はい、私は学校に行きます」が普通の文である言語と、⑤「学校に行くの?」、「うん、行くよ」で十分な言語があつて、後者は前者を略したものではない。日本語で「あなたは学校に行きますか」、「はい、私は学校へ行きます」というのは正しい日本語で可能な文ではあるが、「あなたは」と「私は」が強調されている文で、「Do you go to school? Yes, I do.」の訳ではない。英語や「Go to school? Yes, go.」といえないのはもちろんである。これは英語がヨーロッパの多くの言語と同様に主語・述語と揃い、本来その二つの間に照合がみられる言語だからである（この照合は英語では衰えており、三人称単数現在の

主語のとき、動詞に-sがつくという形が残っているにすぎない）。

それに反してわが日本語はあくまでも述語だけの文が本来の姿で、少し前で見たとように人称代名詞が加わった形はそれで人称が示されるのではなく（人称は言語外の状況から明らかである）、他ならぬあなたが行くのを強調していて、他ならぬ私が行くことを強調しているのである。

③このように主語・述語が揃った文を両肢文、述語だけの文を単肢文という命名を河野六郎博士が提唱しておられるが、これによれば英語は両肢文の言語、日本語は単肢文の言語である。そして、単肢文でも日本語は文の中心が文末に来るパターンで、これはアルタイ諸語に共通のパターンなので、これに対して河野博士は、アルタイ型用言複合体という術語をあてておられる。

③日本人が日本語を使う場合、それを空気の如く無意識で使っていたのが、外国語を習うことにより日本語も意識して使うようになるというのは、外国語習得のもたらす気づかれていないメリットである。その結果日本語も意識された客体として理解される言語一般への理解は断然高まってくる。

多くの言語研究者は様々な外国語を研究したあと、その研究対象が母語に戻ってくる。これは耳や目が衰えたりするという物理的な理由によることもあるが、一度自分の母語を客観的对象として捕えることができる、自らがインフォーマントになれるわけであり、あらゆる言語の中で一番よく知っている言語だからである。そして母語の難しさを知って、そこからまた逆に外国語を学ぶときの慎重さを得るのである。

（千野栄一「言語学を学ぶ」（一部改変）による）

〔注〕

アプリアオリ——経験する以前に与えられている意。先驗的。
先天的。

シュメール語——古代メソポタミア文明を築いたシュメール
人の言語。

屋上屋を架す——屋根の上に屋根をつくること。転じて、無
駄なこと。

「ich」や「mein」、「je」や「mon」、「a」や「moi」

——それぞれドイツ語、フランス語、ロシア語で「私
が」と「私の」を意味する。

河野六郎（くわの りくろう）——日本の言語学者。

アルタイ諸語——中国北部から中央アジア・東部ヨーロッパ
にかけて分布する諸言語。

インフォーマント——情報提供者。

〔問1〕⁽¹⁾ところが実際には日本語はとりわけ難しい言語でもなければ、

特殊な言語でもない。とあるが、「日本語はとりわけ難しい言語
でもなければ、特殊な言語でもない」と筆者が述べる理由として
最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 日本語特有の文字体系や表記法があっても、日本語を上手に話せる
外国人はたくさんいるから。

イ 多くの外国人が日本語は特殊で難しい言語だと考えているが、それ
は迷信に過ぎないから。

ウ 日本語と様々な外国語を比較してみると、日本語だけにしかない特
別な例は皆無だから。

エ 日本語と英語を比較すると、英語の方によほど特殊で珍しい表現法
が多く存在するから。

〔問2〕⁽²⁾ 日本語を特殊語視しているうちはまだましだが、やがて、外国語の知識から日本語に対して誤った判断を下すようになる。」と

あるが、「外国語の知識から日本語に対して誤った判断を下すようになる」とはどういうことか。最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 日本語は主語が省略されていても意味が通じるにも関わらず、外国語を学ぶことで日本語にも主語があるのが当然だと考えるようになること。

イ 日本語は主語がない文が自然な表現として成立するにも関わらず、外国語を学ぶことで日本語にも主語があるのが当然だと考えるようになること。

ウ 日本語は主語を強調したい時のみ主語を置く言語であるにも関わらず、外国語を学ぶことで日本語にも主語があるのが当然だと考えるようになること。

エ 日本語は述語が文の中心になるため主語は省略されるにも関わらず、外国語を学ぶことで日本語にも主語があるのが当然だと考えるようになること。

〔問3〕⁽³⁾ 日本人が日本語を使う場合、それを空気の如く無意識で使っていたのが、外国語を習うことにより日本語も意識して使うようになるというのは、外国語習得のもたらす気づかれていないメリットである。」とあるが、どういうことか。最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 外国語を習得することで、日本語を言語と意識して客観的にとらえることができるようになり、言語一般への理解が深まるということ。

イ 外国語を学ぶことで、日本語の構造についても積極的に学ぼうとする姿勢がつかわれ、母語への理解が深まるということ。

ウ 母語に対する価値観が変わることで、意欲的に外国語学習に取り組めるようになり、言語一般への理解が深まるということ。

エ 外国語を習得した後に日本語を研究対象にすることで、日本語を多角的にとらえられるようになり、母語への理解が深まるということ。

〔問4〕本文中に出てくる「日本語」と「英語」に関し、文中の①から

⑤は、それぞれ、A「日本語のみに当てはまるもの」、B「英語のみに当てはまるもの」、C「両方に当てはまるもの」、D「両方に当てはまらないもの」のどれに当たるか。その組み合わせとして最も適切なものは、次のア・イ・ウ・エ・オのうちではどれか。

- ① 進行形がない
② 「昨日買います」、「明日買います」で間に合っている
③ 「私が」と「私の」で違う語を用いる
④ 「あなたは学校に行きますか」、「はい、私は学校に行きます」が普通の文
⑤ 「学校に行くの?」、「うん、行くよ」で十分

- | | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア | ① A | ② C | ③ C | ④ B | ⑤ A |
| イ | ① C | ② D | ③ C | ④ A | ⑤ B |
| ウ | ① A | ② D | ③ B | ④ B | ⑤ A |
| エ | ① C | ② B | ③ B | ④ D | ⑤ A |
| オ | ① A | ② D | ③ C | ④ A | ⑤ B |

〔問5〕この文章の展開を説明したものとして、最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 最初に日本人の日本語の捉え方について言及し、次に日本語特有の表記法に関して筆者の見解を述べ、続けて英語特有の文法について説明し、最後に英語と日本語の相違点について述べている。

イ 最初に日本人の日本語の捉え方について言及し、次に日本語についての迷信に関して筆者の見解を述べ、続けて日本語に対する誤った考えを説明し、最後に外国語習得の意義について述べている。

ウ 最初に日本人の日本語の捉え方について言及し、次に日本語についての迷信に関して筆者の見解を述べ、続けて外国語特有の表記法を説明し、最後に母語を習得することの利点について述べている。

エ 最初に日本人の日本語の捉え方について言及し、次に日本語特有の表記法に関して筆者の見解を述べ、続けて日本語と英語の相違点を説明し、最後に英語を習得することの効果について述べている。

〔問6〕国語の授業でこの文章を読んだ後、「私が考える日本語の特徴」

というテーマで自分の意見を発表することになった。このとき、あなたが話す言葉を具体的な体験や見聞を含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ一字と数えよ。

次の文章は、『伊勢物語』の主人公の男が、仲間とともに都から東国に旅をする場面と、その解説文である。これを読んであとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りゐて乾飯食ひけり。その沢にかきつばたといとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。から衣きつつなれにしつましあればはるきぬる旅をしぞ思ふとよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり。

三河の国の八橋という場所にたどり着いた。なんでそこを八橋というかというと、川の水が蜘蛛のように八方に流れているからで、しかも橋を八つも渡してあるので、八橋というのだった。その沢のほとりの木陰に馬から降りて座って、乾飯を食べた。その沢にカキツバタがたいそう美しく咲いていた。それを見てある人が、『かきつばた』という五文字を句頭に置いて、旅の心情を詠んでごらん』と言ったので、次のように詠んだ。

慣れ親しんだ妻を都に残してきた。その妻のことを思うと、どれほどはるばるやって来た旅かを実感するのです。
と詠んだので、一行はみな、乾飯の上に涙を落として、乾飯がふやけてしまった。

男たち一行は、三河の国（今の愛知県東部）にある八橋というところによってきました。八橋がどこかはよくわかりません。今の愛知県知立市にはたしかに八橋という地名があるのですが、これは『伊勢物語』を慕って後世に名付けられた地名です。ただ、それがどこはこの場合あまり問題になりません。「三河」という川に縁のある国で、縦横に川が流れていて、橋がたくさん架かっている、というイメージが大切です。「八」というのは、八個に限定されず、数が大変多いことを表します。さあ、ずいぶん変わった土地です。川が四方八方に伸びていて、しかも橋があちこちに架かっているなんて。まるで迷路のようですね。日常生活空間とは全く違っています。異世界とさえ呼べるかもしれない。

いくら何でも異世界は言い過ぎだろう。そう思いますか。でも、川というのは、そもそもこちら側とあちら側を隔てるものです。昔から、村や市の行政区画を示す境界となったりしました。渡っていくことで、こちらとは違う世界へ入っていく境目になる。渡るための橋が境界であることはわかりやすいですね。そして境界・境目は、人間が変容を迫られる、特殊な空間です。たしかに異世界といえるかもしれません。じゃあ、川の向こう、橋の向こうは？ それらは、異世界というより、別世界です。別世界は別世界の日常があります。境界に立ち上がる異世界は、日常が許されない時空なのです。ですから、人間はここで、危機に襲われることになります。

(1) いわゆる説話や伝承のようなお話なら、ここで妖怪や化け物でも出てきそうです。しかしここに出現したのは、カキツバタです。カキツバタは湿地帯に生えますから、「八橋」の地に群生していても、おかしくあ

りません。今でいえば、ミズバシヨウの咲き誇る尾瀬*おせの光景を思い浮かべればよいのかもしれません。尾瀬にも徒歩で歩くためにあちこちに橋が架かっています。

けれども尾瀬を知らない平安時代の人にとっては、この言葉が喚起するイメージは、もつと不思議なものがあります。迷路のような川と橋があり、その川辺に美しいカキツバタが、一面に咲いているのです。なんだか妖しげです。魔力のようなものを感じさせる、といったらおおげさでしょうか。少なくとも異世界感をますます掻かき立てただろうことは間違いないでしょう。

そこで彼らは、この妖しげなまでに美しいカキツバタを、征服しようとなりました。もちろん武力によってではありません。和歌を詠むことによつてです。一般に、不可解な物事が突然出現してびっくりしたとしても、言葉で表すことができれば、理解可能な範囲に収まり、気持ちも落ち着きます。精神的に自分のものにできる、といえましょうか。それが普通の言葉でなく、和歌という特別な言葉だった場合は、表現する難易度も上がりますから、相手を組み伏せる力もずっと強くなる。組み伏せるだけではありません。相手の持っている強烈な力を吸収して、自分のものに⁽²⁾だつてできる。この場合は、そんな和歌の中でも、とびきり難易度の高い技が繰り出されました。普通なら「かきつばた」をそのまま歌に詠み込むところなのに、こんな不思議な異世界の中ではとても足りないと思ったのでしよう、和歌の五つの句の最初の字を「か・き・つ・は・た」とするという制約を設けたのです。

「か○○○○○／き○○○○○○○／つ○○○○○／は○○○○○○○／た○○

○○○○○」とするわけですね。平安時代には濁点というものがありませんから、清音濁音の区別はしなくてもかまいません。

しかも「旅の中の思い」を詠め、というのです。超難問です。昔話の中には、難問を出され、それを見事に解いて見せることで、困難な状況を切り開く、というパターンがあります。知恵も一つの武器なのでですね。和歌はその知恵を表す言葉の武器の最たるものといえます。簡単には作れない、特別な表現だからです。

さあ、男は、魔力を感じさせるといいたくなるようなこの妖しげなカキツバタに対抗するために、どのように難問を解いたでしょうか。この難問を解く鍵は何でしょうか。

男はひらめきました。「衣」を中心にしたらどうかと。最初の句は「から衣（唐衣）」としてあります。これがこの歌のテーマとなります。唐衣は、もともととは外国風の衣服のことですが、美しく珍しい衣をいいます。衣は妻を思い出す媒介となりました。衣を準備するのは妻の務めですし、共寝をする時には、衣と一緒にかぶっていた、あるいは互いの衣を交換して寝ていた、ともいいます。衣も妻も身に寄せるものですね。そうやって妻に「慣なれる」し、衣も着続ければ「褻なれる」（くたくたになる）。そういえば、衣の衿えりの部分を「褻つま」ともいう。洗って干すために広げ伸ばすことを「張はる」といいます。これを「はるばる」と書ければ、旅と結びつく。ほら、衣を中心としたことで、旅で妻を思う気持ち

褻なれ…褻つま…張はる…
慣なれ…妻つま…はるばる…来き

左右で対応するのが掛詞かけことばです。右が衣にまつわる言葉。左のうち、「慣れ」「妻」が妻を思うという文脈で、「はるばる」と「来」が旅の文脈。つまり、衣をテーマとして示し（初句で表現されている）、それに関する言葉を綴じ糸にする（縁語えんご）ことで、妻を思うこと（主として、第二・三句で表現されている）と、旅をしていること（主として第四・五句で表現されている）とが、しっかりと縫い合わされているのです。「か・き・つ・は・た」を句頭に配する技巧に加えて、こののですから、なんとも超絶的な技術です。人間離れしているとさえ思えます。昔の人だっけそう感じたことでしょう。人の意思で作ったというより、神様の思おもひ召しといいたくなる、超自然的な力を感じさせるのです。なぜでしょう。掛詞とか縁語とか、言ってみれば、言葉が偶然に似通っているにすぎません。ところが、その偶然が、神の仕事を思わせることで、まるで運命のように感じられるのです。

この歌の偶然の出会いに満ちた言葉のパワーは、旅がもたらす苦しみや悲しみを、すっかり浄化してしまいました。しかしただ苦しみを抑えたというだけではありません。つらい一方のものを、感動的なものへと変えてしまったといえましょうか。⁽⁴⁾ これこそが文学の力、詩の力といふべきでしょう。和歌という武器で、彼らは危険を乗り越えたのです。「乾飯」（携行に便利な乾かし飯）が「ほとびにけり」（ふやけてしまった）という、ユーモラスな言い方にも気を付けましょう。普通なら、涙が袖を濡らした、というようなところです。明るい救いを感じませんか。深刻な映画を見て、かなり重苦しくなった気持ち、最後の軽いユーモラスなエピソードによって、ほの明るくなるようなものとい

えましようか。「男」たちが危機を切り抜けた証あかしといえるように思います。（渡部泰明「国語は冒険の旅だ」（一部改変）による）

〔注〕 伊勢物語いせものがたり——平安時代の物語。約百二十五の話からなり、和

歌を中心に構成されている。

尾瀬おぜ——群馬県、福島県、新潟県にまたがる高原。湿地植物

の群生地帯。

縁語えんご——意味の上で縁のある言葉を使う修辭法。

〔問1〕⁽¹⁾ いわゆる説話や伝承のようなお話なら、ここで妖怪や化け物でも出てきそうです。しかしここに出現したのは、カキツバタです。とあるが、筆者がここで言いたいことはどういうことか。

最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 異世界とはいっても実際には平凡な日常と大きくは変わらないということ。

イ 説話や伝承とは異なり『伊勢物語』は日常の世界を描いた物語であるということ。

ウ 不安な気持ちで旅を続ける男たちにも心が和むほっとした瞬間があるということ。

エ 突如として現れたカキツバタは妖怪や化け物に通じる存在であるということ。

〔問2〕⁽²⁾ だって 同じ意味・用法で使われているものを、次の各文の——を付けた「だって」のうちから選べ。

ア 靴だって洋服だって全部姉のお古です。

イ だってあなたがそう言ったじゃないですか。

ウ 彼女は誰にだって笑顔を見せたためしがない。

エ この件については第三者の証言だって残っている。

〔問3〕⁽³⁾ 「か・き・つ・は・た」を句頭に配する技巧に加えて、というのですから、なんとも超絶的な技術です。とあるが、『か・き・つ・は・た』を句頭に配する技巧⁽³⁾に加えられた「超絶的な技術」の内容の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 「唐衣」という語で詠みはじめ、「衣」に縁の深い「妻」への思いを「慣れ」「棲」「褻れ」の語で強調する一方、「来」「着」「はるばる」で妻から遠く離れた旅の途中にしていることを表している。

イ 「美しい衣」を表す「唐衣」で詠みはじめ、「カキツバタ」を「妻」の姿に見立て、「着」「褻れ」「慣れ」「棲」「張る」の語によって妻への思いを強調しつつ、「来」「はるばる」で旅を表している。

ウ 「唐衣」という語で詠みはじめ、「衣」に関連する「着」「褻れ」「棲」「張る」の語を用い、それぞれに「来」「慣れ」「妻」「はるばる」という意味を含ませて、妻への思いと旅を表している。

エ 「美しい衣」を表す「唐衣」で詠みはじめ、「衣」に関する「着」「褻れ」「棲」「張る」の語と、妻や旅を思わせる「慣れ」「妻」「はるばる」「来」を対比させ、旅愁の思いを強調している。

〔問4〕⁽⁴⁾ これこそが文学の力、詩の力というべきでしょう。とあるが、ここでいう「文学の力、詩の力」の説明として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 表現を工夫することを通して創作の喜びを感じ、つらかったことも感動的な思い出に変えてくれるということ。

イ 詩の言葉をきっかけに過去の様々な思いが呼び覚まされ、これまでの生き方に自信を持たせてくれるということ。

ウ 技巧を凝らした言葉の力によって直面する苦難を乗り越え、その先に明るい希望を感じさせてくれるということ。

エ 偶然の言葉の連なりが幸せだった昔の記憶につながり、目の前の苦しみをすっかり浄化してくれるということ。

〔問5〕 波線部分に、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句

の上にすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。とあるが、

「ある人」がこのように言つた理由を筆者はどのように考えているか。最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア カキツバタが群生する妖しげな光景に打ち勝つためには、これを言葉で表現して理解の内に収めてしまうのがよいと考えた。

イ 目の前に広がるカキツバタの幻想的な光景に感動し、その強力な力を奪取するには複雑な技巧を用いた和歌が最適だと考えた。

ウ 異世界に広がるカキツバタの美しい光景に幻惑され、その情景は非日常の言葉である和歌でしか表現できないと考えた。

エ 群生するカキツバタの異様な光景から自分たちの身を守るためには、こちら側から先手を打つ必要があると考えた。

〔問6〕 『伊勢物語』は平安時代以降、人々に親しまれた作品である。

このことを示している一文を本文中から抜き出し、最初の七字を記せ。ただし句読点、記号も字数に含む。